**２０２３年７月29日(土)　　　海應院会場**

 藺草慶子

 新しき街の直角夏旺ん 柳沢美恵子

 風穴の扉をなめて夏の霧 前田恵美

〇 軒深き木曽の駅舎や秋近し 中村幸子

 片陰を譲り合ひ行く坂の町 木村さとみ

 この時間片蔭もなく人もなく 天野明雀

 伊藤修文

 片蔭の途切れて人も途切れけり 吉沢道夫

 片陰を譲り合ひ行く坂の町 木村さとみ

 片蔭に知るこの町のかたちかな 藺草慶子

 石垣の隙間に小石蟬しぐれ 藺草慶子

〇 信号を待つに形陰やや遠し 藺草慶子

 吉沢道夫

〇 空蟬を抱く空蟬や愛無限 木村さとみ

 片陰に知るこの町のかたちかな 藺草慶子

 七節のゆつくり行けとかんかん帽 島木　翠

 めまとひやここより野山よそよそし 島木　翠

 父母の墓誌なぞればつんと赤蜻蛉 木村さとみ

 柳沢美恵子

 炎天に寺院の松の鱗かな 北原みゆき

 裸の子ナ行ヤ行のもどかしく 中村幸子

〇 信号を待つに形陰やや遠し 藺草慶子

 信濃路の片かげなべて登り坂 伊藤修文

 夏雲は大志のごとし虚子旧居 吉沢道夫

 木山靖史

 かき氷嘘でそまった赤き舌 伊藤修文

〇 片蔭にしばし休らふ旅鞄 吉沢道夫

 風穴の扉をなめて夏の霧 前田恵美

 終末時計ねぢ巻く如き蟬の声 藺草慶子

 末期なら水とりあへず生ビール 伊藤修文

 中村幸子

〇 風穴の扉をなめて夏の霧 前田恵美

 信濃路の片かげなべて登り坂 伊藤修文

 木漏日とも氷室を漏るる冷気とも 梅田実代

 をちこちに裏白そよぐ氷室かな 梅田実代

 父母の墓誌なぞればつんと赤蜻蛉 木村さとみ

 天野明雀

〇 夏雲は大志のごとし虚子旧居 吉沢道夫

 峰雲のさらに高きへちぎれ雲 藺草慶子

 炎天に寺院の松の鱗かな 北原みゆき

 片陰に知るこの町のかたちかな 藺草慶子

 かき氷嘘でそまった赤き舌 伊藤修文

 島木　翠

〇 片蔭に知るこの町のかたちかな 藺草慶子

 その睫毛見たし蚊を待つ広座敷 前田恵美

 をちこちに裏白そよぐ氷室かな 梅田実代

 蜘蛛の囲や的のごときの大輪に 北原みゆき

 緑蔭に寝転ぶ牛は喰ひ疲れ 伊藤修文

 前田恵美

〇 新しき街の直角夏旺ん 柳沢美恵子

 木陰得て目高元気や虚子のかな 柳沢美恵子

 ツーアウト満塁きゆうり齧りつつ 梅田実代

 炎昼の松は四百年を生く 木村さとみ

 峰雲のさらに高きへちぎれ雲 藺草慶子

 梅田実代

 風穴の扉をなめて夏の霧 前田恵美

 風穴やのびらかな声老鶯に 島木　翠

 信号を待つに形陰やや遠し 藺草慶子

 めまとひやここより野山よそよそし 島木　翠

〇 虚子の字と眼鏡と丸し冷し瓜 前田恵美

 北原みゆき

 風穴の扉をなめて夏の霧 前田恵美

 片陰に知るこの町のかたちかな 藺草慶子

〇 夏雲は大志のごとし虚子旧居 吉沢道夫

 溽暑にも松の枝振り揺るぎ無く 天野明雀

 片蔭にしばし休らふ旅鞄 吉沢道夫

 木村さとみ

 風穴の扉をなめて夏の霧 前田恵美

 末期なら水とりあへず生ビール 伊藤修文

 夏雲は大志のごとし虚子旧居 吉沢道夫

 高原のホテルのランチ匙涼し 北原みゆき

〇 緑蔭に寝転ぶ牛は喰ひ疲れ 伊藤修文